

たんぽぽ



vol. 49

平成17年1月発行

発行者 放送大学

富山学習センター

責任者 所長 小谷 仲男

団塊世代と教育

客員教授 奥 田 實

団塊世代は、敗戦後、戦地から男たちが帰ってきた結果の第1次ベビーブーム期に誕生した。私自身はその中の一人で、1949年に生まれた。まだ、戦後のにおいが残っていた。幼い頃、進駐軍の将校が、ポインターを連れ散歩している姿を見かけた記憶がおぼろげながらある。何か近寄りがたい、怖ろしさを感じていた。

近くに幼稚園があり、園児たちが登下園する姿を毎日駅前の通りに面したわが家から眺めていた私は、いつの頃からか、幼稚園に通うこと望み、入園することになった。2年間の幼稚園生活を終えようとしていたとき、両親は、後1年通うものと思っていた、だが役場から小学校への就学通知が来た。何とものんきな話だが、4月1日生まれの子は、いわゆる「早行き」ではないと思いこんでいたのだ。入学式の当日、担任の先生までが、生年月日を見て間違っただけで入学してきたと思い、校長先生の所まで走って行ったという。

大阪の南部の、二宮金次郎の石像が建つ木造の典型的な田舎の学校である。田植えや、稲刈りの時期は休みとなり、秋の「だんじり祭り」の日も休校であった。ゆったりとした時代だ。もっとも、とくに田舎では物質的に余裕がなく、貧しさが十分残っていたときでもある。クラスで、2人ほどが、弁当をもってこれずに、昼休み校庭でうろうろしていた姿が目につく。親が忙しいとき、小さな弟を負ぶって登校してきた女の子もいた。

私は、そこで3年間過ごし、4年生になって、大阪市内の公立小学校に電車で行くことになった。当時急増していたいわゆる越境入学である。まさに団塊の世代ゆえの大集団の中での生活が始まった。50人学級で、小学校は12クラス、中学校は26クラスであった。

全校3,600人ほどの中学校では、実力テストの度毎、千二百何人中何番という席次が付けられる競争的ムードの一方、さまざまな家庭環境の生徒がいて、先生が目も届かないということで、おおらかな環境で、楽しい毎日。多くの友との交流と意義深い経験ができたと思う。人数が多いから放任されていたこともあり、ルールは緩やかであった。

高校時代も、運動会等の行事の後は、お酒も飲む打ち上げが恒例で、学校および補導担当者から黙認されていた。修学旅行の九州までの船中、先生と麻雀をしたことが懐かしい。偏差値などという言葉を知らない、心豊かな学校生活を送った。それを思い起こすと、どこかで、日本の教育はおかしくなったと思う。